仲間第一貝塚採集の石器・貝斧

―「門上秀叡・千恵子コレクション」収蔵資料紹介―

吉　田　健　太

1. はじめに

那覇市市民文化部博物館は、平成25年3月に門上秀叡・千恵子両氏が収集した厨子（蔵骨器）239基および沖縄関連資料4602点を収蔵した。今後、このコレクションを旧所蔵者の名前を冠し「門上秀叡・千恵子コレクション」として、那覇市立壺屋焼物博物館において保管･研究および展示公開し、活用していく予定である。購入資金および運搬費、収蔵棚の設置には沖縄振興特別推進交付金（壺屋の歴史・文化発信事業）を活用した。沖縄関連資料4602点には知花焼・古我知焼・喜名焼といった沖縄各地の窯跡から採取した資料が多数占めているが、焼物以外の資料も収蔵されている。本稿で扱う石器資料もコレクション資料として収蔵されており、石器・貝斧資料全点に、仲間第一貝塚から採集したという旨の注記がなされている。仲間第一貝塚は八重山先史時代を検討する上で重要な遺跡であることから、本稿では「門上秀叡・千恵子コレクション」に含まれる石器・貝斧資料の紹介をおこなう。

2. 資料紹介

資料は総数20点の石器・貝斧である。内訳は石斧11点、石器6点、敲石1点、砥石1点、貝斧1点である。1点ごとの全長、最大幅、最大厚、重量を計測し、写真撮影をおこなった。写真は表面、裏面、側面、刃部の4面展開で掲載した。以下、1点ごとの観察を記述していく。

第2図1は全長108㎜、最大幅77㎜、最大厚31㎜、重さ357g。基部片である。注記には「仲間第一　76-10-29」と記されている。自然面を利用しながら周縁に剥離調整をおこなっている。研磨は確認されず、打製石斧の基部片と考えられるが、刃部が欠損しているため局部磨製石斧もしくは半磨製石斧の可能性も考えられる。平面形態は刃部がないものの、基端から徐々に広がる様相を見せていることから撥形と推測される。

第3図2は台形全長133㎜、最大幅44㎜、最大厚36㎜、重さ328g。注記には「76-8　西表仲間第一」と記されている。表面、裏面は自然面をそのまま残している。逆に両側、特に左側辺は打ち欠いた痕がみられる。敲き面は傾斜が形成されており、矢印のような形をしている。握りのいい棒状の形態を有する敲石と考えられる。

よしだ・けんた：（那覇市立壺屋焼物博物館学芸員）

表１　「門上秀叡・千恵子コレクション」収蔵　石器・貝斧資料

図版	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ（g）	注記	備考
第2図1	108	77	31	357	仲間第一　76-10-29	石斧
第3図2	133	44	36	328	76-8　西表　仲間第一	敲石
第4図3	98	24	16	75	76-8　西表　仲間第一	石斧
第4図4	76	48	19	127	仲間第一　76-10-29	石斧
第5図5	77	35	17	79	76-8　西表　仲間第一	石斧
第5図6	76	37	16	72	76-8　西表　仲間第一	石斧
第6図7	97	47	14	76	76-8　西表　仲間第一貝塚	石器
第6図8	87	39	19	81	76-8　仲間第一	石斧
第7図9	111	56	13	114	76-8　西表　仲間第一	石斧
第8図10	118	44	23	196	76-8　仲間第一	石斧
第9図11	94	75	22	183	76-8　仲間第一	石器
第10図12	120	31	35	242	76-8　西表　仲間第一貝塚	石斧
第10図13	56	39	20	69	76-8　西表　仲間第一	石斧
第11図14	64	38	7	25	76-8　西表　仲間第一	石器
第11図15	73	27	42	120	76-8　西表　仲間第一	石器
第12図16	80	54	29	135	仲間第一　76-10-29	石器
第12図17	129	71	27	283	仲間第一　76-10-29	砥石
第13図18	94	50	14	107	仲間第一　76-10-29	石斧
第13図19	95	40	12	46	仲間第一　76-10-29	石器
第14図20	108	51	28	162	76-8　西表　仲間第一	貝斧

第4図3は全長98mm、最大幅24mm、最大厚16mm、重さ75g。小型のノミ型石斧である。側面に「76-8　西表仲間第一」と注記している。全体に研磨調整が施されている。基端から刃縁にかけて幅が広がる平面形態を有する。刃部の正面形態・刃部正面体における刃縁形態はともに直線であり、片刃の様相を呈する。正面および背面には使用の際に削られたと推測される痕が見受けられる。

第4図4は全長76mm、最大幅48mm、最大厚19mm、重さ127g。片刃の局部磨製石斧である。裏面には「仲間第一76-10-29」と注記されている。表面全体および裏面刃部におけて研磨調整が施されている。また両側辺、および裏面基部は打ち欠いて調整をおこなっている。平面形態としては刃部が若干広く、撥形の形状を有する。また基部中央両側面において若干のくびれが形成されている。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は内湾形となっている。刃部は磨耗しており、使用された痕跡が見られる。また表面中央部から刃部にかけてキズが見られる。

第5図5は全長77mm、最大幅35mm、最大厚17mm、重さ79g。片刃の局部磨製石斧である。裏面に「76-8　西表仲間第一」と注記している。かなり黒味が強い色調である。表面全体および裏面刃部におけて研磨調整が施されている。刃先30ｍｍほどから角度を変えて磨いている。裏面は刃先30mmほど磨いて調整しているが、それ以外の面は粗い加工にとどまっている。基部から刃部にかけて幅に大きな変化はなく、短冊形の形状を有する。刃部の平面形態は弧状になっており、

正面体における刃縁形態は緩い内湾形となっている。刃の左側には欠損部が見られるものの、刃にそれ以外の磨耗や欠損は見られない。

第5図6は全76㎜、最大幅37㎜、最大厚16㎜、重さ72g。片刃の局部磨製石斧である。裏面に「76-8　西表仲間第一」と注記している。石材は緑色片岩と見られる。表面、裏面の刃部およそ20㎜に研磨調整を施している。それ以外は自然面もしくは打ち欠いて調整を施している。基部から刃部にかけて幅に大きな変化はなく、短冊形の形状を有する。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は内湾形となっている。刃にはキズが数箇所見られる。表面や刃部正面形状を観察するに、石斧の右側が欠損して現在の形状となったと推測される。

第6図7は全長97㎜、最大幅47㎜、最大厚14㎜、重さ76g。刃先が狭い局部磨製石器である。裏面に「76-8　西表仲間第一」と注記している。表面、裏面ともに刃端から10㎜ほど研磨調整を施している。基部には磨いた痕は確認できない。基部から刃部にかけて幅が狭まる形状を有している。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は直線状となっている。刃端には無数の傷を確認できる。

第6図8は全長87㎜、最大幅39㎜、最大厚19㎜、重さ81g。片刃の局部磨製石斧である。裏面に「76-8　仲間第一」と注記している。黒味が強い色調である。基端裏面には赤色に変色している部分が見られる。表面刃縁より45㎜および裏面刃部におけて研磨調整が施されている。刃部はおよそ10ｍｍである。側面などは磨いた痕はなく、粗い加工にとどまっている。基部から刃部にかけて幅に大きな変化はなく、短冊形の形状を有する。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は直線状となっている。刃部裏面には無数の使用痕が見られる。

第7図9は全長111㎜、最大幅56㎜、最大厚13㎜、重さ114g。片刃の局部磨製石斧である。裏面に「76-8 仲間第一」と注記している。表面刃端から10㎜、裏面刃端から5㎜ほど研磨調整を施している。刃部はおよそ10㎜である。それ以外では磨きは見られない。基端から刃端にかけて幅が広がる定角形の形状を有する。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は緩い外湾形となっている。刃部にはキズはあまり見られない。

第8図10は全長118㎜、最大幅44㎜、最大厚23㎜、重さ196g。片刃の局部磨製石斧である。裏面に「76-8　仲間第一」と注記している。材質は緑色片岩とみられる。表面全体に研磨した後が見られる。また裏面も刃部と基端に研磨痕が見られる。刃部はおよそ20ｍｍである。側面などは磨いた痕はなく、粗い加工にとどまっている。両側面には、表面裏面ほどではないものの、研磨した形跡が確認できる。基部から刃部にかけて幅に大きな変化はなく、短冊形の形状を有する。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は内湾形となっている。刃部には使用の際に出来たと考えられる欠けが数箇所見られる。

第9図11は全長94㎜、最大幅75㎜、最大厚22㎜、重さ183g。局部磨製石器である。裏面に「76-8　仲間第一」と注記している。黒味が強い色調である。基端裏面には赤色に変色している部分が見られる。表面全体には研磨調整を施している。また裏面は刃部10㎜にわ

たり磨かれた痕が見られる。裏面の刃部以外は剥離調整が為されている。刃部の平面形態は緩い弧状になっており、正面体における刃縁形態は直線状となっている。刃部裏面には無数の使用痕が見られる。掻器のような形状を持つ。

第10図12は全長120mm、最大幅31mm、最大厚35mm、重さ242g。片刃の断面方形ノミ型石斧である。裏面に「76-8　西表　仲間第一貝塚」と注記している。石材は緑色片岩を用いている。表面全体、裏面全体、両側辺刃端より20mmにおいて研磨調整を施している。両側辺基部は粗い調整が施されている。表面および裏面には大きな削り痕が確認できる。基部から刃部にかけて、右側辺が狭まる形状を呈している。刃部の平面形態は直線になっており、正面体における刃縁形態は右下がりの直線状になっている。刃縁は研磨調整がよく施されており、刃左側において使用痕が見られる。

第10図13は全長56mm、最大幅39mm、最大厚20mm、重さ69g。両刃の磨製石斧であるが、基部および石斧左側は欠損している。裏面に「76-8　西表　仲間第一」と注記している。表面・裏面全体に研磨調整が施されている。表面と比べて裏面の研磨はやや粗い印象を受ける。刃部はおよそ15mmである。右側辺には稜を形成して粗い研磨調整が施している。基部から刃部にかけて幅が広がる形態と考えられ、撥形の形状を有する。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は内湾形となっている。

第11図14は全長64mm、最大幅38mm、最大厚7mm、重さ25g。薄く成形された打製石器である。裏面に「76-8　西表　仲間第一」と注記している。磨かれた跡は確認できないが、全体的に打ち欠いたと推測される。

第11図15は全長73mm、最大幅27mm、最大厚42mm、重さ120g。裏面に「76-8　西表　仲間第一」と注記している。石材は緑色片岩である。基部上方のみ残存しており、刃部は欠損している。左側面から表面にかけて磨きが施されている。右側面には稜線が確認でき、平面部分がある。残存部は把手の形を見ることが出来る。断面は縦に長い楕円形状を形成している。

第12図16は全長80mm、最大幅54mm、最大厚29mm、重さ135g。裏面に「仲間第一　76-10-29」と注記している。打製で調整を施している石製品である。材質は砂岩である。欠損が確認できる。

第12図17は全長129mm、最大幅71mm、最大厚27mm、重さ283g。砥石と考えられる。裏面に「仲間第一　76-10-29」と注記している。材質は砂岩である。表面には幅1mm、長さ40mmにわた直線状の溝が形成され、研いだ結果形成されたキズと考えられる。こうした研いだ痕とみられるものは他にも数箇所確認できる。裏面基端には10mmほど敲いた痕がみられる。敲き石としての用途も兼ね合わせていたのではないかと考えられる。

第13図18は全長94mm、最大幅50mm、最大厚14mm、重さ107g。片刃の局部磨製石斧である。裏面に「仲間第一　76-10-29」と注記している。表面・裏面ともに刃端から約10mm研磨調整を施している。それ以外は自然面もしくは打ち欠いて調整を施している。刃部は約10mmである。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は内湾形となって

いる。

第13図19は全長95mm、最大幅40mm、最大厚12mm、重さ46g。薄い形状を有している局部磨製石器である。裏面に「仲間第一　76-10-29」と注記している。表面の刃端より15mmほど研磨調整を施している。裏面には磨いた痕跡は見られない。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は緩い内湾形となっている。また刃部には微小なキズが数箇所確認できる。

第14図20は全長108mm、最大幅51mm、最大厚28mm、重さ162g。シャコガイ製の貝斧である。材質はシャコガイ（オオジャコ）である。正面は右側を中心に磨いて調整を施しており、裏面には磨耗されているものの貝の成長痕を確認することが出来る。チョウツガイ部分を利用して製作した「蝶番部利用型」のタイプに分類することができる。片刃で、刃部はおよそ約30mmである。刃部の平面形態は弧状になっており、正面体における刃縁形態は内湾形となっている。

3. 仲間第一貝塚の概要

以上、石器資料の観察を述べてきた。次に、すべての資料に注記のあった仲間第一貝塚についての概要を記述していく。

仲間第一貝塚は西表島仲間川河口の北岸、大富集落に通ずる県道の両側の古砂丘上に立地している。現在の仲間川の橋のたもと一帯に広がる貝塚である。標高5～6M砂丘地に夥しい量の貝が散布している。現況は道路の拡張工事やキビ畑の耕作によって撹乱が著しい。

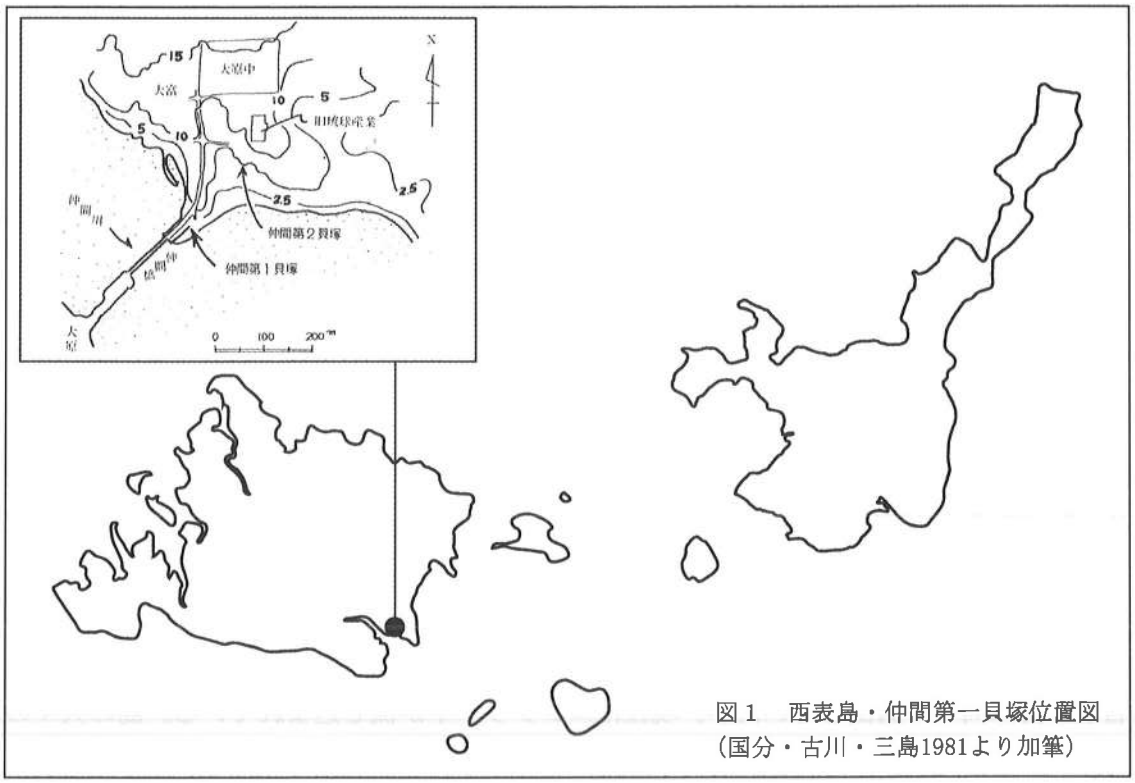


図１　西表島・仲間第一貝塚位置図
（国分・古川・三島1981より加筆）

昭和31年県指定史跡登録されている。鉄製の船釘や唐代銭貨「開元通宝」の出土、炭素1測定法の1250±65年BPの年代から、7世紀頃から9世紀後半頃の無土器時代の遺跡と比定されている。

本貝塚の調査史は古く、1955年に山城活、細原徹らにより発見され、1956年に多和田真淳により試掘調査がなされている。多和田は「72センチメートルもの貝層下から五寸位の角のある手打の船釘が出たのには肝をぬかれた。然し事実はまげる事はできない。(中略)貝層内から出た唯一個の支那製青磁片は鉄釘と共に時代を決定する鍵となるであろう。」と記している(多和田1956a, 1956b)。このことは無土器遺跡の仲間第一貝塚はそれほど古い遺跡ではない可能性を示していた。その後、仲間第一貝塚は1959年に滝口宏を団長とする早稲田大学八重山学術調査団により、先の多和田の試掘グリッドの隣に発掘調査トレンチが設定され調査がおこなわれている(西村・玉口・大川・浜名　1960)。1960年「沖縄八重山」に調査成果を発表した。その中で有名な「早稲田編年」が提唱されている(滝口1960)。無土器の仲間第一貝塚を第一期とし、有土器の下田原貝塚、仲間第二貝塚などを第二期とする編年である。これは八重山先史時代の基礎的な編年表となり、これをもとに八重山の編年表がこれまで形成された経緯がある。その後1974年に文化財調査で訪れた金武正紀は石斧6点、凹石1点、磨石1点、と共に開元通宝1点を発見採集されている。同氏は当該銭貨と類似無土器遺跡の資料をもとにして、仲間第一貝塚の年代の位置づけに対して疑問を呈した(金武1974)。この論文が八重山の考古学編年として定着していた早稲田編年の第一期と第二期を逆転させる契機となった。また上記の金武氏が開元通宝を発見された1974年には三島格、国分直一、古川博恭の研究者らも踏査をおこなっており、その表面採集ではあるが石斧1点と八重山地域では事例報告のない打製石鏃1点を報告している(三島・国分・古川　1974)。1989年には沖縄県教育庁文化課が発掘調査を実施されている。石斧3点、敲石6点のほか大量の貝が出土し、土器は検出されなかった。石器の種類、量が多く生産されている様子が見えるのに対し、土器や貝製品については乏しい印象はぬぐえない石器を中心とする採集文化の様相が見られるとしている(上原　1995)。また大濱永亘が著書の中で、開元通宝３枚およびシャコガイ製貝斧1点を採集している(大濱1999)。このように仲間第一貝塚は八重山先史時代を考える上で重要な遺跡といえる。しかし、現在までに数度調査がなされて石斧が報告されているものの、石器・貝斧資料が公開されているのはわずかしかないのが実状である。

4. 考察・課題

金武正紀によると、「1974年5月9日、波照間島空港建設予定地内の文化財調査で竹富町教育委員会を訪ねたら、西表の仲間第一貝塚が橋の取付道路工事で一部破壊されていることを聞き、翌日西表に渡った。道路工事のために、昨年2月までは厚さ1メートル以上の包含層が海に向って露出していたが、現在はコンクリートが流し込まれている。島の人々の話では、工事のときに多くの石斧が発見されたらしい。しかし最も驚いたことは、貝塚内

の畑がこれまでの鍬による耕作から耕耘機を使ったために、これまでよりさらに深くまで破壊してしまったことである。（中略）従来より深く耕されたために、これまで攪乱されない包含層が攪乱され、そのために多くの遺物が表面に露出していた（金武1974）」とある。本稿で紹介した資料全点に76年の注記が為されていることより、本資料は、工事後に発見された多くの石斧の一部と推測される。

仲間第一貝塚期の石器は、剥離・敲打・研磨などの技術を利用し製作された磨製石斧・打製石斧・石包丁、製作時に手ごろなサイズを選択し、使用の痕跡により使用方法が推測される敲石・磨石・凹石・石皿・砥石・などがある。ほとんどの遺跡で石斧・磨石・敲石・凹石が出土し、その中で磨製石斧の出土量も多い。次に打製石斧・敲石・磨石・凹石・有孔石製品の出土が多い。同文化の石斧もトルム層に由来する変成岩類を利用し、形態的に撥方グループ、短冊・方形グループ、狭刃形グループに大別され、前文化と同様の特徴をもつ。製品技術も局部磨製・半磨製・磨製の3種に大別され、変形磨製が主体をなす点で前文化と共通の特徴を示す。しかし、やや磨面が広く、側面を研磨するものが多く、比較的丁寧に仕上げられるようになる。サイズも基本的に前文化と同様に７～12cmのものが主体である。しかし20cm以上の大型品、5cm以下の小型品が目立つようになる。現在確認されている一番長い石斧は崎枝赤崎貝塚出土の26cmのものである。敲石・磨石・凹石は前文化同様に重さ400～2000g前後の自然石を利用し、多種多様な石材が選択されている。

今回の資料紹介をした延長として、資料観察した上での若干の考察を述べていく。「新石器時代前期は半磨製・局部磨製が多く、比較的偏平で小型が多い。それに対し後期は半磨製・局部磨製が目立つ。また前期に比較して研磨面がやや拡大、ていねいな仕上げ、大型化の傾向が見られる。また方角片刃石斧が伴う場合がある。（安里1993）」と述べているように、本資料での観察結果は、仲間第一貝塚期の石斧様相と当てはまるものである。

ただし第6図7のような刃部を尖らせている局部磨製石器、第7図9のような両刃の定角形の石斧、そして第9図11のような石器も含まれていることから、現在示されている以上の多様な石器文化を有していたと推測できる。本稿では石材の分析をおこなうことはかなわなかったため、本資料の産出地同定をおこなうことはできなかった。今後の課題としていきたい。

最後に、今回の資料紹介及び検討が可能にしたのは、旧所蔵者の門上秀叡・千恵子氏がおこなった収集の賜物であり、多大な敬意を表したい。なお本稿で紹介した資料は那覇市立壺屋焼物博物館に保管されている。

引用参考文献

安里嗣淳　1993 「南琉球の原始世界　-シャコガイ製貝斧とフィリピン」『海洋文化論　環中国海の民俗と文化　第一巻』比嘉政夫（編）　凱風社

阿利直治　1982 「Ⅴ　遺物」『大田原遺跡　沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第4号　石垣市教育委員会

石垣市総務部市史編集課　2007 「研究史　八重山考古学のあゆみ」『石垣市史ビジュアル版　第1巻』石垣市

上原静　1995 「西表島・仲間第一貝塚の調査概要」『沖縄県教育庁文化課紀要』第11号　沖縄県教育委員会

大城慧　2001 「西表島の遺跡」『西表島総合調査報告書　自然・考古・歴史・民俗・美術工芸』沖縄県立博物館

大濱永寛　2003 「八重山諸島の石器」『沖縄県史　各論編第二巻考古』　沖縄県教育委員会

大濱永亘　1999 「第３章　無土器時代（先史時代第二期）」『八重山の考古学』先島文化研究所

大堀皓平　2009 「第4章第3節　石器」『瀬底島・アンチの上貝塚　ー個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告ー』本部町教育委員会

金武正紀　1974 「仲間第一貝塚出土の開元通宝について」『南島考古だより』第13号　沖縄考古学会

国分直一　1972 『南島先史時代の研究』　慶友社

国分直一・古川博恭・三島格　1981 「沖縄・仲間第一貝塚出土の石器」『南島考古』第7号　沖縄考古学会

島袋綾野　2002 「波照間島下田原貝塚採集の石器資料」『南島考古』第21号　沖縄考古学会

高宮廣衛　1994 「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』第14号　沖縄考古学会

高宮廣衛　1995 「八重山型石斧の基礎研究(3)」『南島考古』第15号　沖縄考古学会

高宮廣衛　1999 「八重山型石斧の基礎研究(4)」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第3巻第1号　沖縄国際大学総合学術学会

滝口宏　1960 「総括」『沖縄八重山』早稲田大学考古学研究室報告第七冊　校倉書房

多和田真淳　1956a 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧　1956年版』琉球政府文化財保護委員会

多和田真淳　1956b 「考古の旅（仲間貝塚の発掘）」沖縄タイムス

西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚　1960「八重山の考古学」『沖縄八重山』早稲田大学考古学研究室報告第七冊　校倉書房

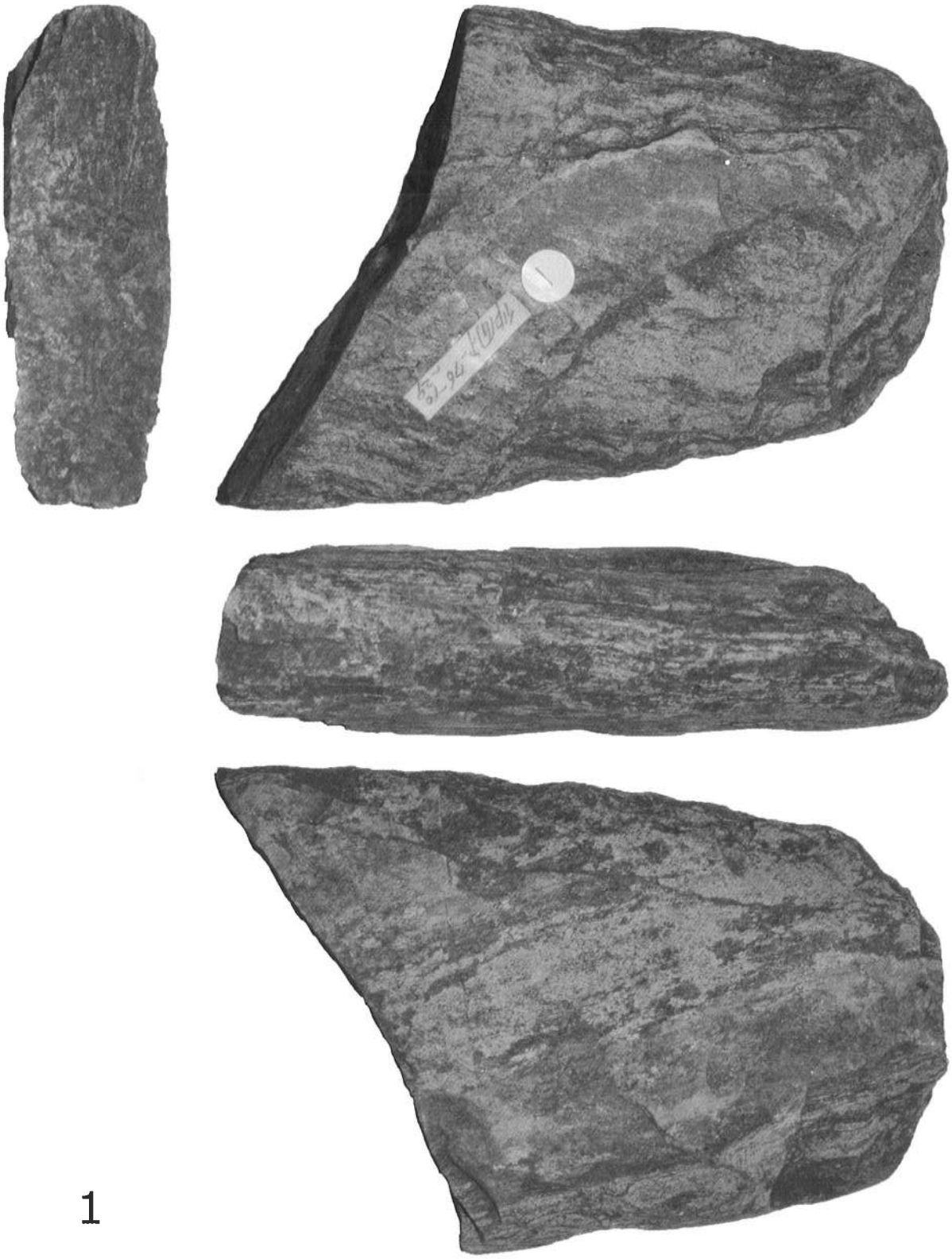
松葉崇　2007 「先島諸島における先史時代の石斧と貝斧」『南島考古』第26号　沖縄考古学会

表・図版

図１　　国分・古川・三島　1981をもとに筆者作成

表１　　筆者作成

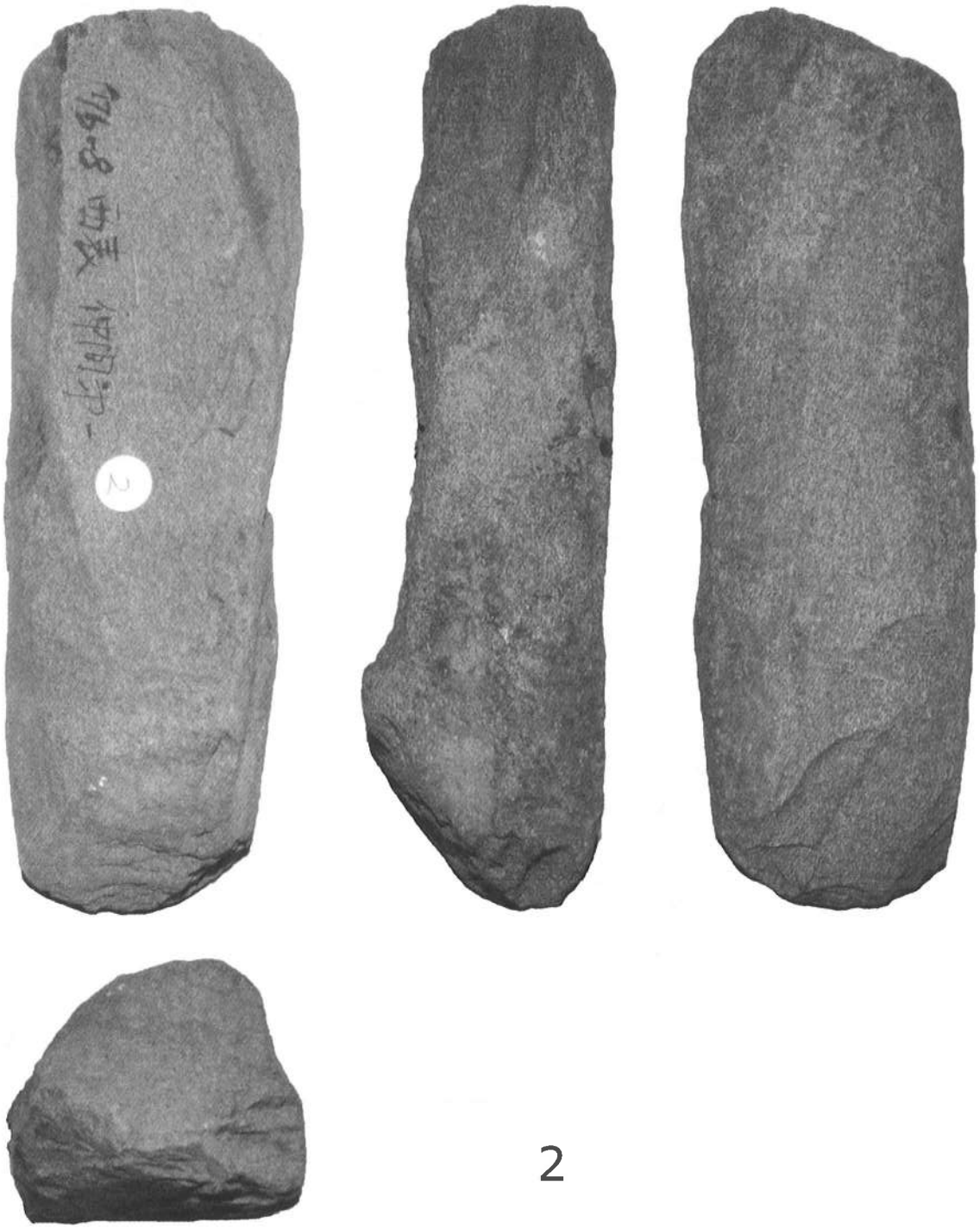
図２-図１４　　筆者作成



1

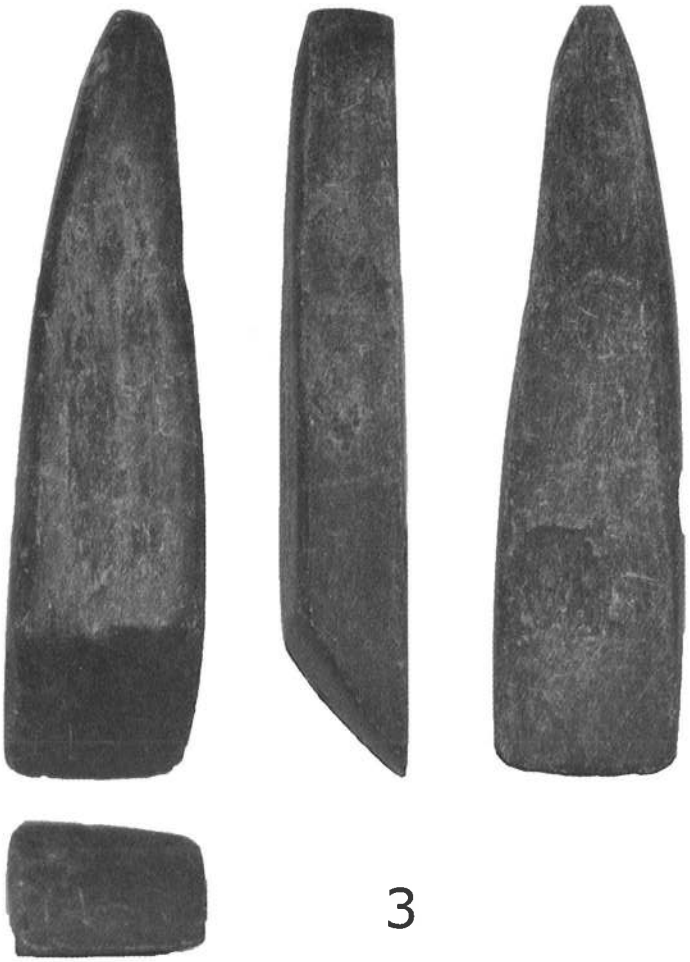
第２図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm

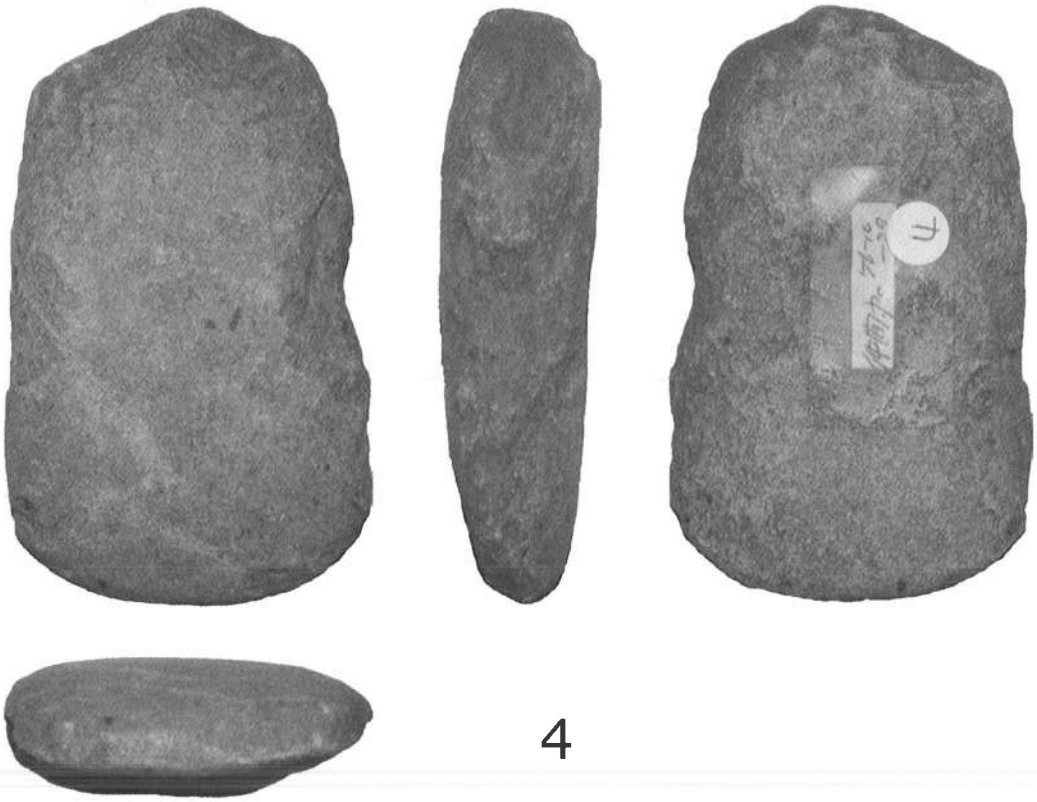


第３図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm



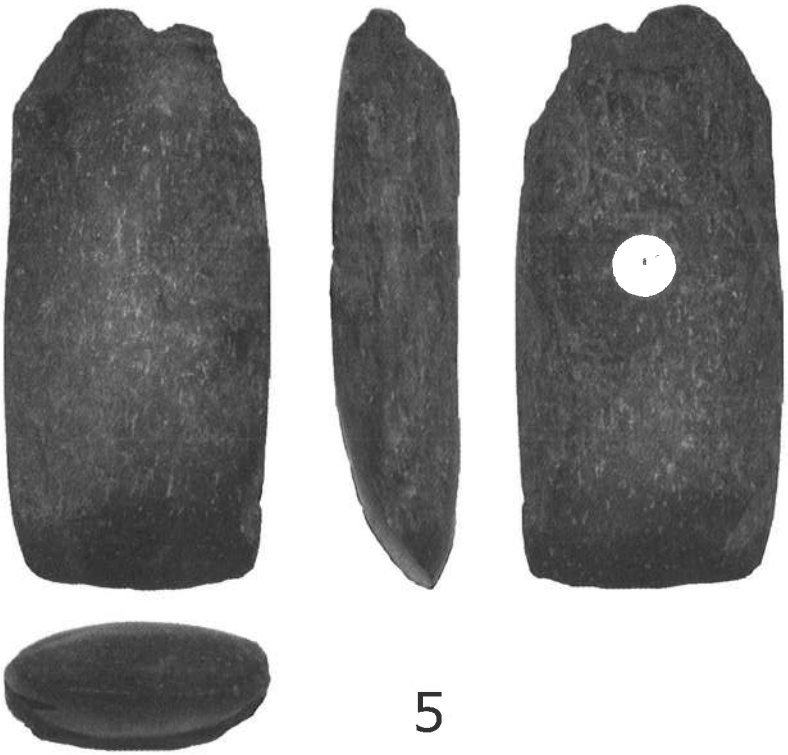
3



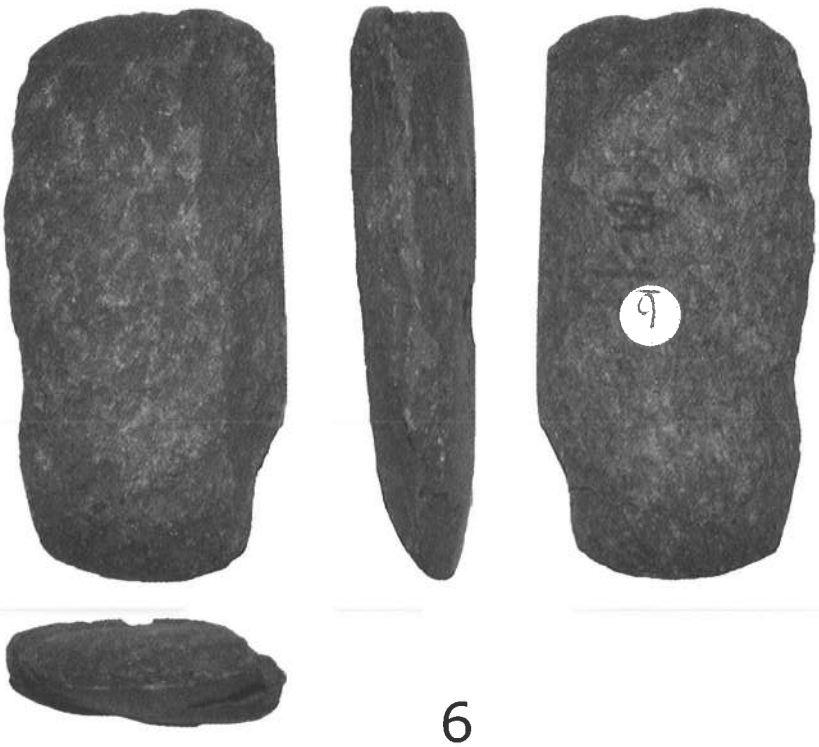
4

第４図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm



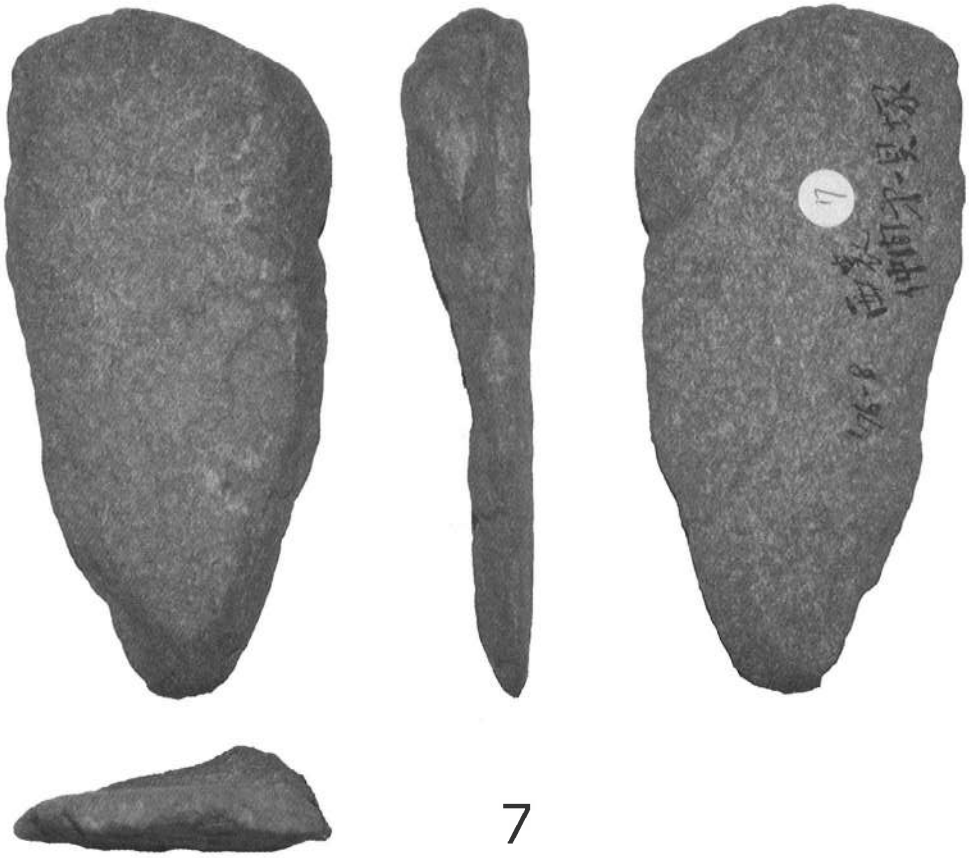
5



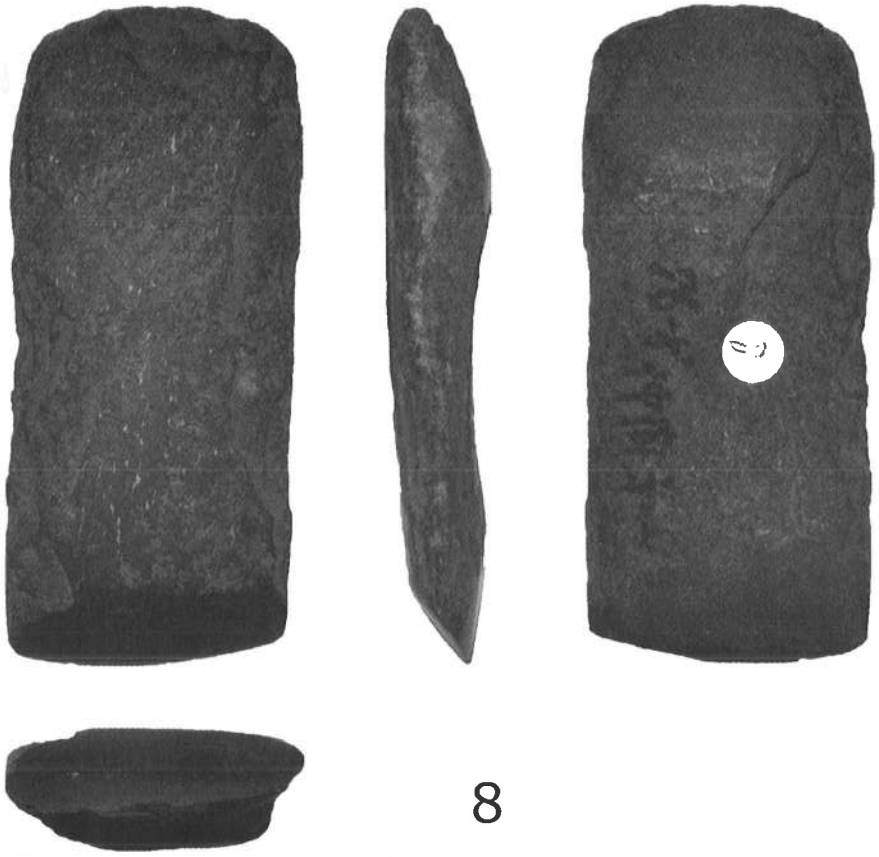
6

第５図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm

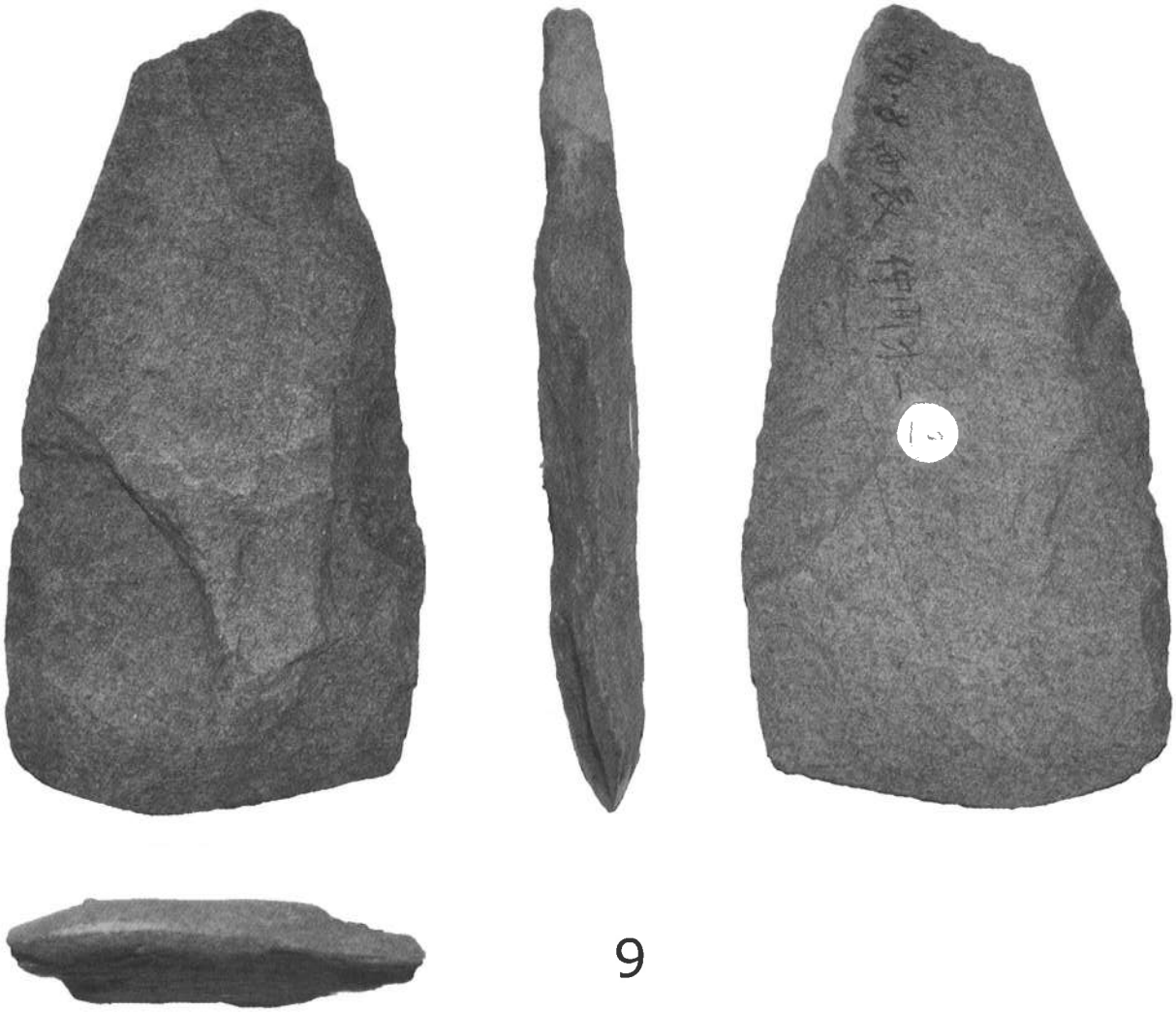


7



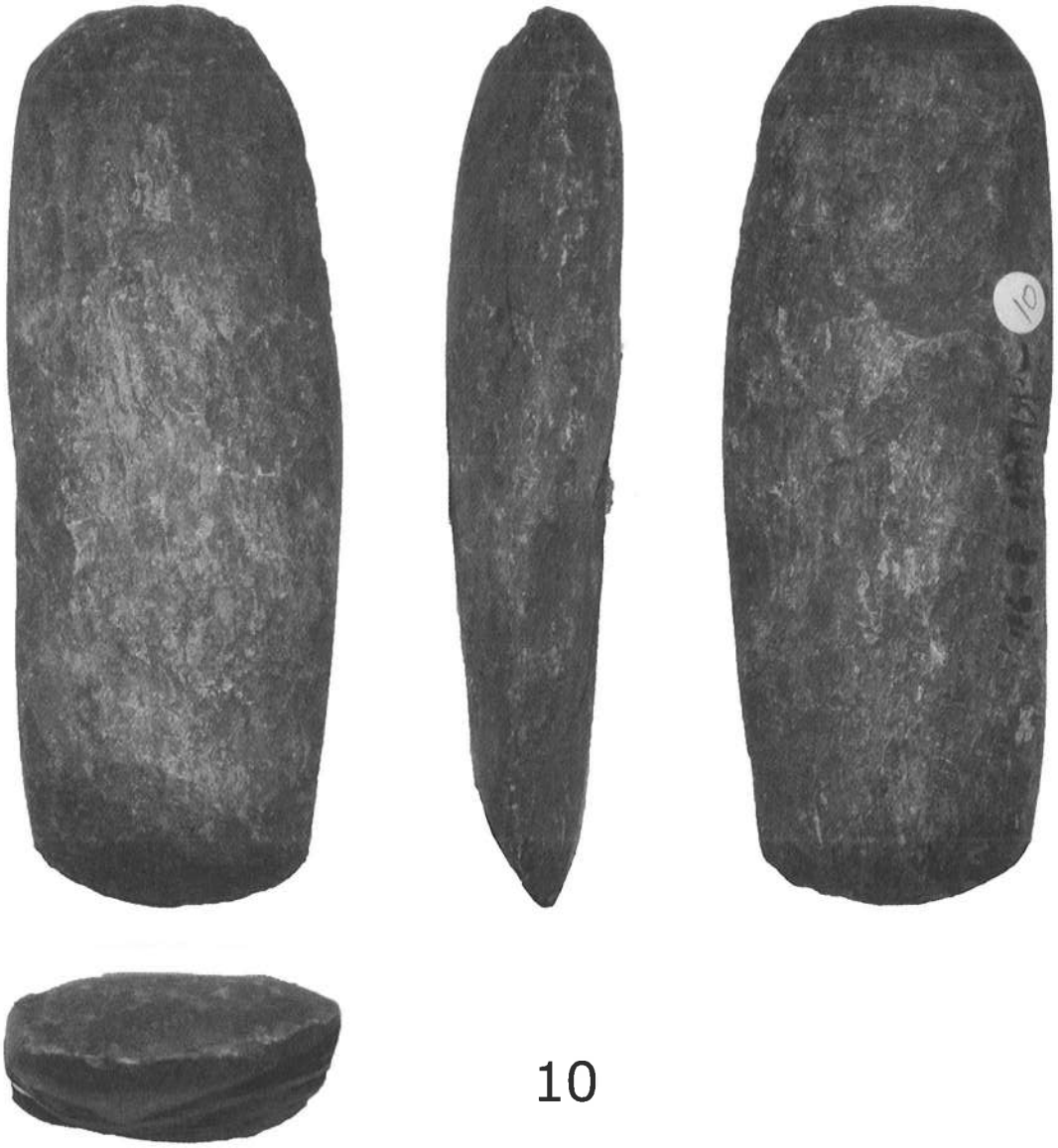
8

第６図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料



第７図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm

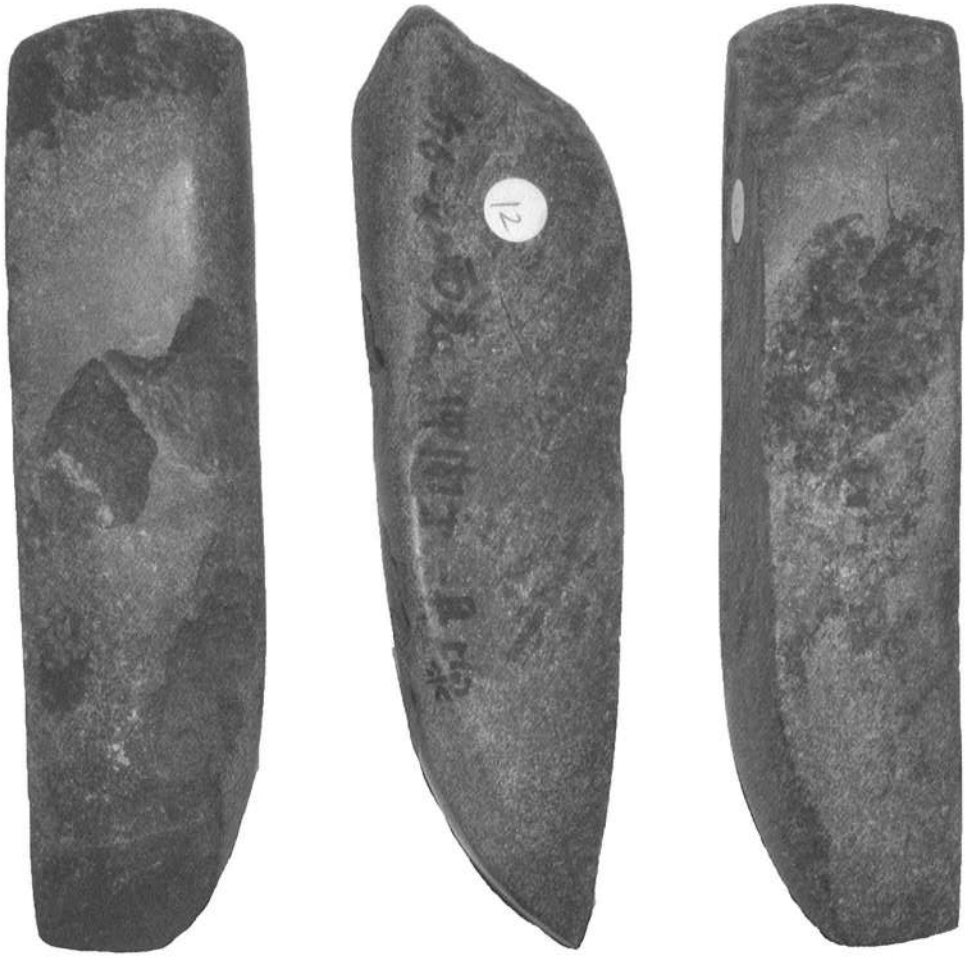


第８図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

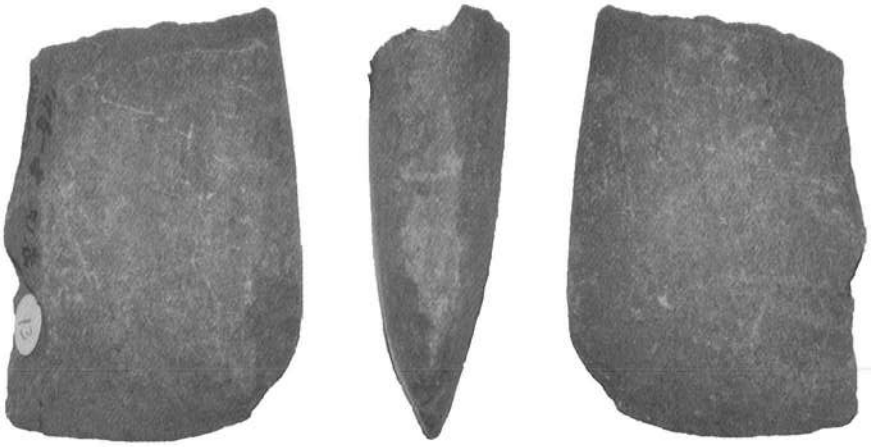
0　5cm

第９図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm



12

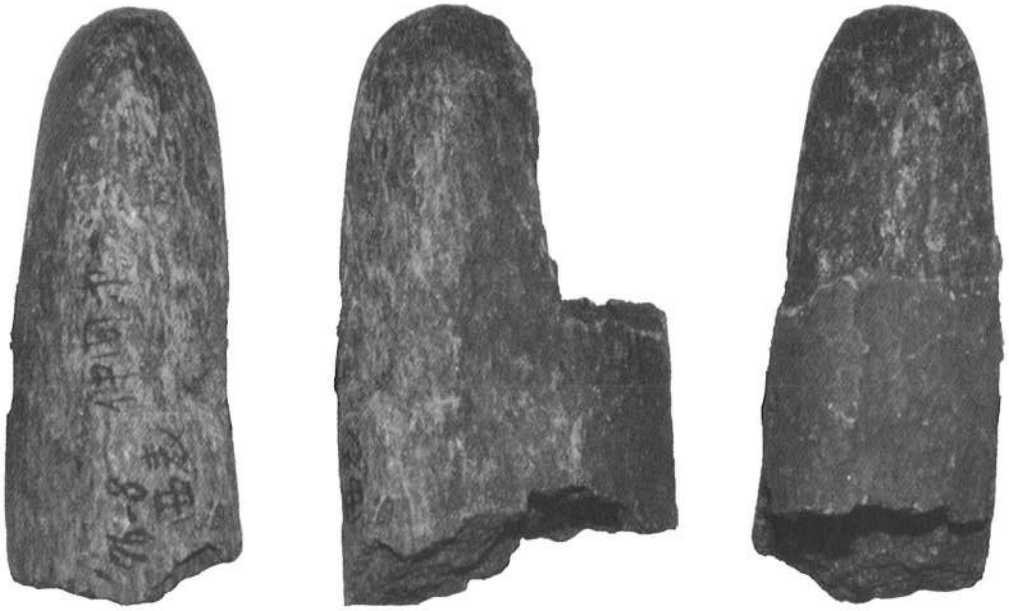


13

第１０図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm

14

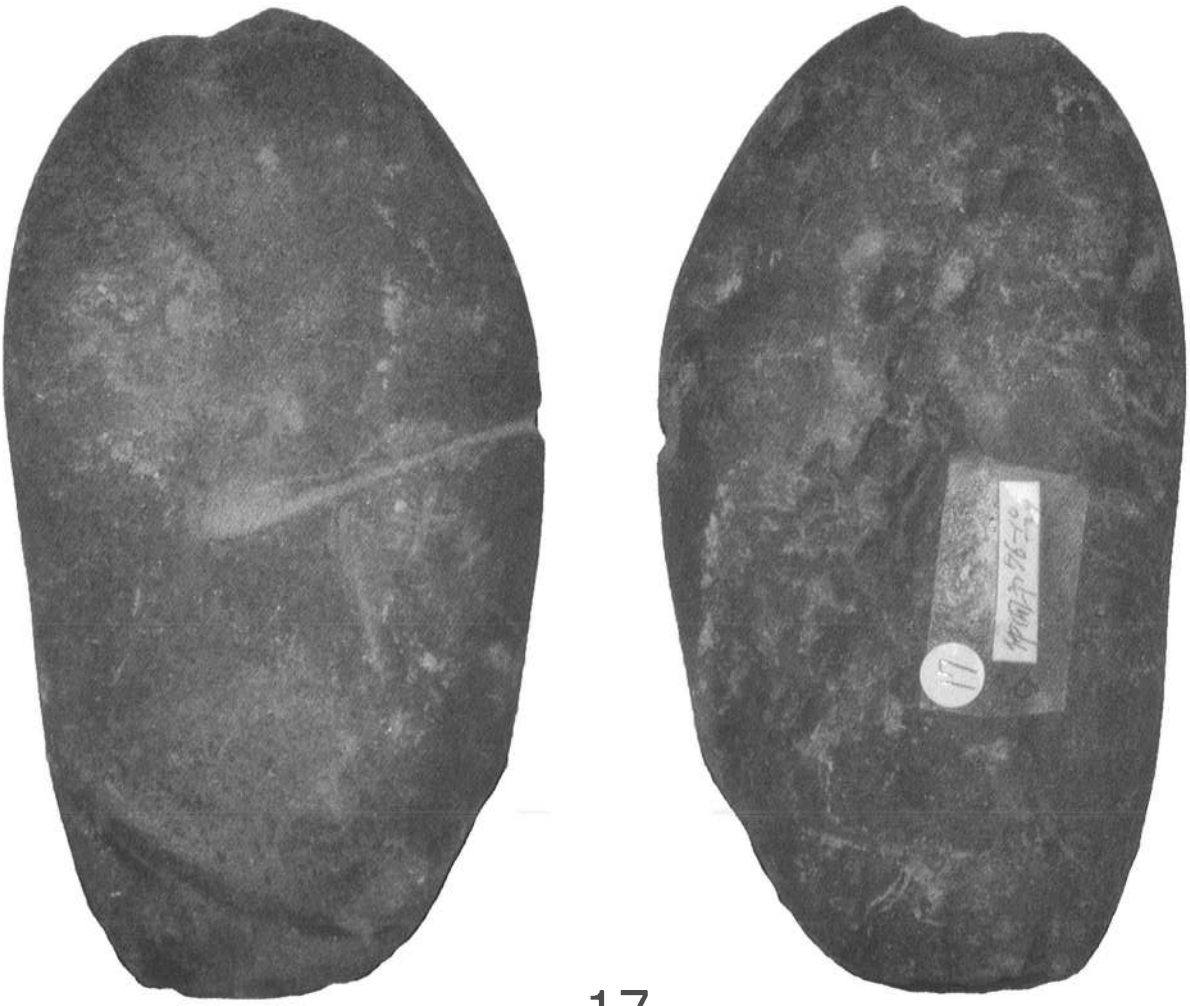


15

第１１図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm

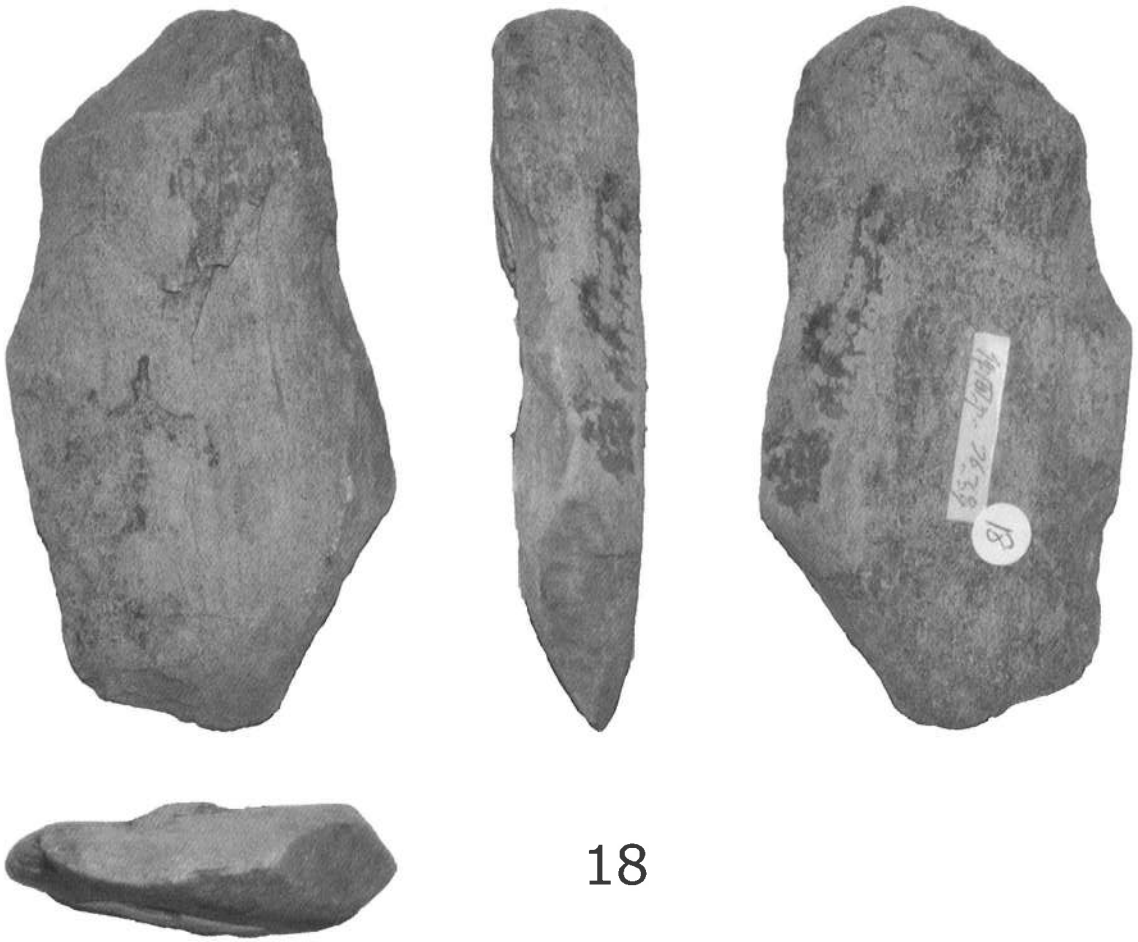
16



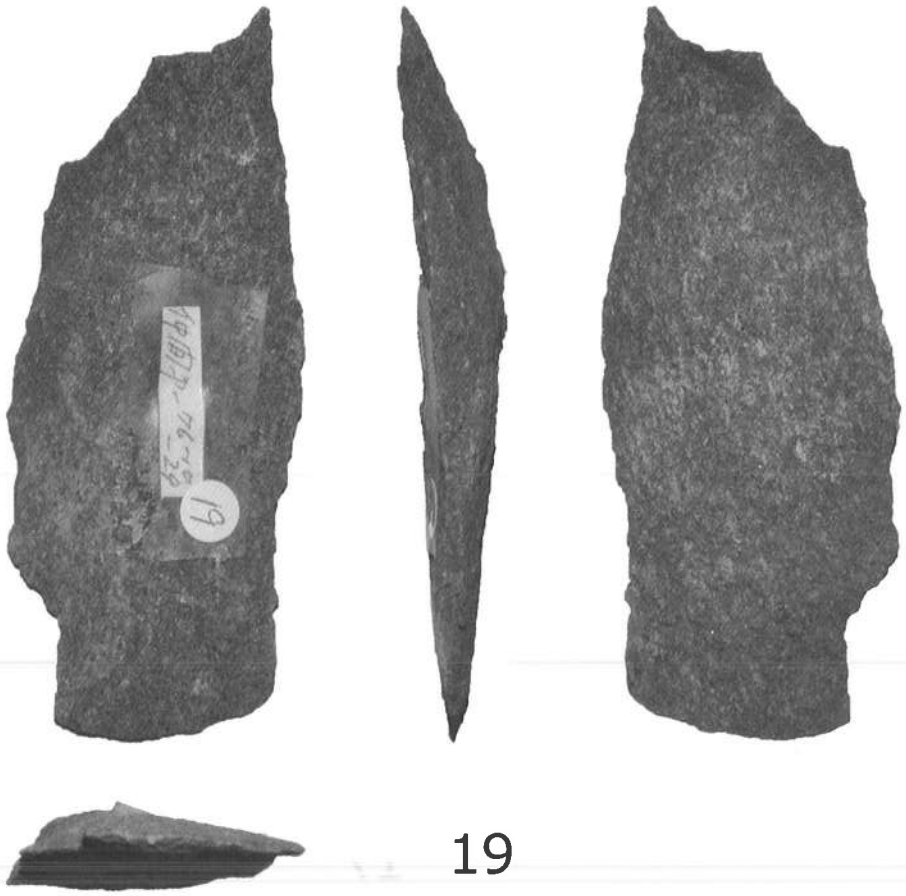
17

第１２図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm



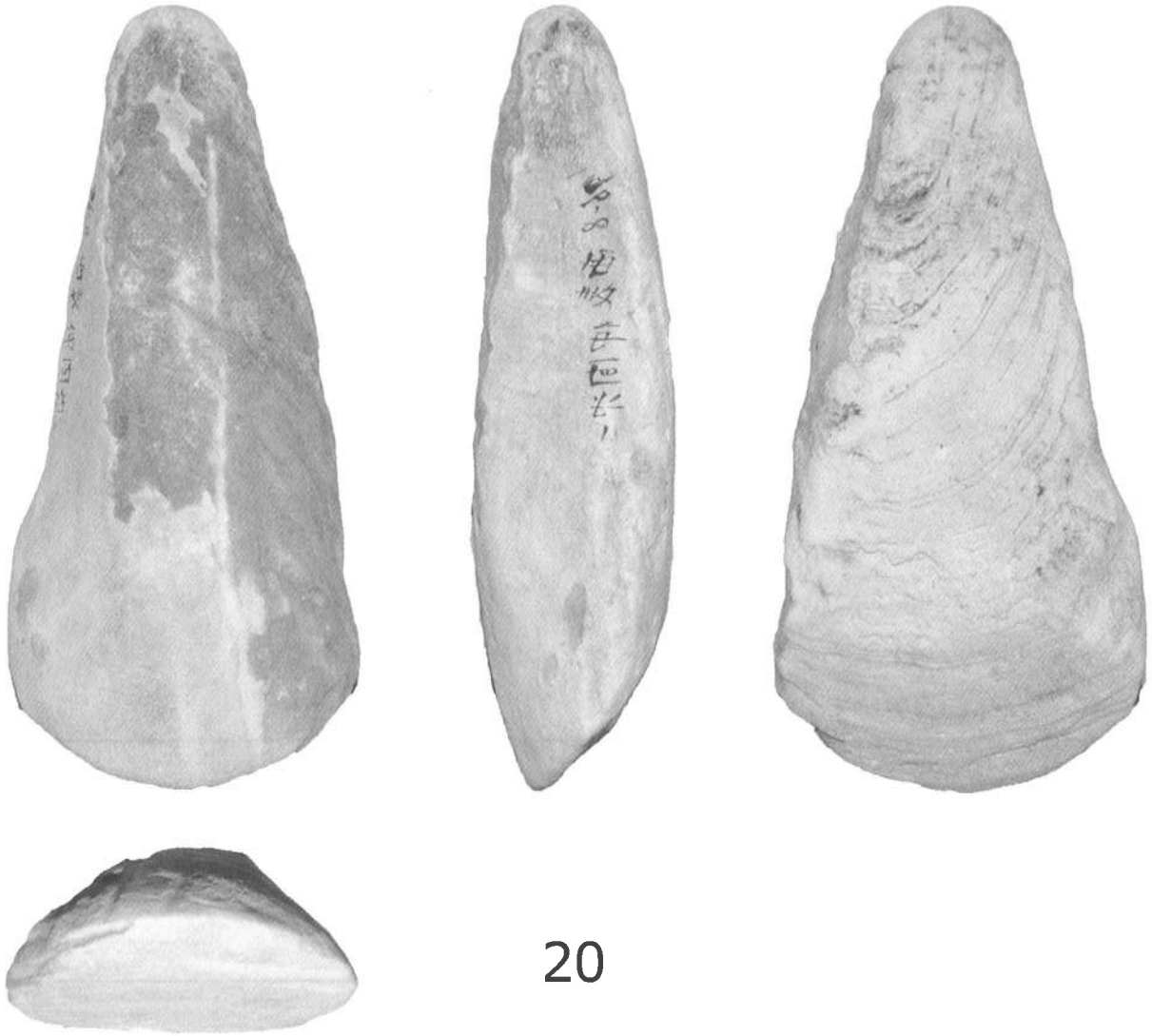
18



19

第１３図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm



第１４図　門上秀叡・千恵子コレクションの石器資料

0　5cm